

嫁いだ娘と嫁ぎ先の対応

国立病院機構東京医療センター
人工臓器・機器開発研究部長
角 田 晃 一

論文を投稿した場合、著者としては経験はないが、娘を嫁にやる様なもので大切にしてもらいたいものと考え、「医療」の編集委員を拜命してちょうど10年がたつ、この間の編集会議における実際のそれらの玉稿と編集業務についてお話ししたい。

最初の編集委員長は鈴木絃一先生で、厚生労働省の本省からも幹事が参加して、いつも日比谷松本楼でコーヒーとケーキがつく、部屋もエレベーターの機能する3Fで行われていた。その後国立医療学会の機関誌となりこれまでのように予算が潤沢でなくなり、編集会議では代わった湯浅龍彦先生のもと国立がんセンター内のがん研究振興財団の会議室を借りてペットボトルのお茶での編集会議となった。その頃の議題は通常の雑誌の編集以外に、いかに購読者を増やし論文の投稿数を保つかとの議論が毎回なされた。それ以前からであるが、Nature, Science, NEJM や Lancet など、雑誌の影響力の一つの指標であるインパクトファクターの高い雑誌を目指すのが医学を含めた自然科学の王道で、このためか医療に限らず日本語の医学雑誌は投稿数が減り、さらにはPubMedに載らなくなった「医療」はなかなか投稿が集まらず、如何に投稿数を増やすかとの議論がなされた。最終的に湯浅先生の英断で、医師中心ではなくメディカルスタッフ全員からの投稿を広く集める方針となった。しかしながら、すぐに原稿が集まるわけではなく国立病院総合医学会のシンポジウムや各施設長からの推薦を集めるようになった。

その後編集委員長が臼井宏先生に代わり、研修医やメディカルスタッフ全員から広く興味を持ってもらえるように、セミナーシリーズとして国立医療学

会の各施設からカンファレンスを臨場感あふれる形式で紹介できるようになった。現在の大島久二先生になり、医学誌の最先端の形式である利益相反などを含む国際誌に引けを取らない投稿形式が確立され潤沢に論文も投稿されつつある。

気づけば編集会議も、ケーキとエレベーターの着かない4Fであるが、いつのまにか日比谷松本楼に戻っていた。

皆さまにお送りいただいた玉稿の審査であるが、編集室に送られた論文が事務担当者により投稿の書類や書式に不備がないか確認整理され大島編集委員長に送られる、その論文を読んで編集委員長が査読委員に送り、その判定をもとに編集委員長が最終判定し採択が決定される。編集会議はおもに、より読者に著者の意図する論文の内容が伝わるように、さまざまな職種の医療スタッフの一員である編集委員が意見を出し合い議論して、編集委員長がそれらの時に個性的な様々な意見を最終的に著者に伝える形式である。

編集会議では、編集委員も多忙な時間に全国から召集されるため、東日本大震災の当日も編集会議中に揺れ、全員が松本楼から日比谷公園に避難した思い出がある。実際医療はかつての医学総合誌でなく医療総合誌であり、特徴としてそれぞれの分野、職種で、その道の専門領域でなかなか譲れない意見も多く出るが、それらの意見を見事に調整しまとめあげるのが「医療」の編集委員長の特筆すべき業務で、こればかりは他の医学専門誌に比べ傍から見ている圧倒的に難しい点と感じる。病院の重責を果たしつつ、その上さらに「医療」編集委員長の業務を続ける歴代編集委員長の諸先生を心から尊敬する。

最後に、医療を安定して発行し続けているのはなにより、表には出てこないが、編集室と国立病院機構本部医療部研究課を中心とした皆様のご尽力の賜である。

「医療」は、メディカルスタッフ全員の様々な意見や考え方、生き様を同じ土俵で平等に読み取る唯一の医療総合誌である、本号全てに目を通していただければわかる、もっとも余滴を読む人はすべて読んでいないかもしれないが。